

寺沢秀文さん

(満蒙開拓平和記念館専務理事)

なぜ「不都合な歴史」と向き合うのか

戦前戦中、全国から二十七万人もの人々が「開拓移民」として中国東北部に渡った。国策であった開拓の名の下に、何が起き、なぜ多大な犠牲が生じたのか。満蒙開拓の歴史や資料を展示する全国唯一の記念館が、二〇一三年に長野県阿智村にオープンして三年半。建設に奔走した寺沢さんに館に込めた思いを聞いた。

「本当の開拓」ではなかった満蒙開拓

——満蒙開拓平和記念館（以下「記念館」）がオープンして三年半が経ちました。

ちょうど十一月十日で、来館者が十万人を超えました。満蒙開拓という、どちらかというとマイナーなテーマの小さな記念館で、しかも場所は長野の山の中なのに。当初、行政に申告した年間の来館予想は五千人でしたから、予想を大きく上回る反響でした。

——寺沢さん自身も、ご両親が長野県南部から旧満州

に渡った開拓団員だったと伺っています。

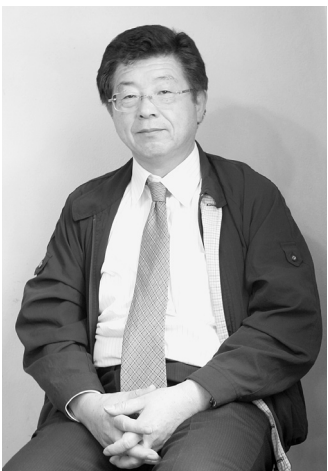
両親は満蒙開拓から戻ってきて、戦後、松川町の増野地区に開拓者として入り、私はそこで生まれました。父親は、山林原野を開拓するつもりで満蒙開拓に行ったところ、そこにはもう家も畑もあった。実はそれは現地の中国人の人たちの家や畑を、非常に安い値段で買い上げて、彼らを強引に追い出し、そこに入ったのが自分たちだということが現地に行ってわかった。といってもいまさら日本に帰るわけにはいかない。

——いちばん上のお兄さんは現地で生まれています。敗戦後、父親は捕虜としてシベリアに三年間抑留さ

れ、母親は開拓団の人たちといっしょに逃げる。一年現地で冬を越す間に、一歳になっていた兄は避難民收容所で命を落としています。

——それでもとにかく両親は二人とも日本に帰ってきて、いまは果樹地帯になっている、増野という開拓地に入った。そこで父親はこう思ったそうです。「今度こそ本当の開拓の苦勞をしてみて、自分たちの大切な農地や家を奪われた、中国人の農民たちの悔しさや悲しさがよくわかった。あれはやっぱり日本が間違っていた。本当に中国の人たちには申し訳ないことをした」と。

私が東京から帰郷して会社を始めたころ、中国残留孤児たちが永住帰国で日本に帰ってきていた。その支援活動を行政とともに行っていた、飯田日中友好協



●てらさわ・ひでふみ 1953年生まれ。長野県松川町在住。満蒙開拓平和記念館副館長・専務理事。長野県日中友好協会副理事長。身元未判明中国残留孤児両親調査員。

会という民間団体がありました。父の話も脳裏にあって私もかわるようになりました。

「不都合な歴史」

——記念館建設の母体になった団体ですね。

支援活動をする中でわかってきたのは、残留孤児として残された人たちの多くは、実はほとんど開拓団の子供たちであったということです。ところが、自分なりに調べてみると、あれだけの大きな被害を出した満蒙開拓なのに、特化した資料館・記念館がない。

当初は国策で行なわれた満蒙開拓だから、国や県で造ってほしいと要望しましたが、結論としては行政の反応はよくなかった。満蒙開拓は「不都合な歴史」であり、そのために終戦から六十年経っても、どこにも記念館、資料館がなかったんでしょう。であれば民間でやるしかない。飯田日中友好協会の中で建設計画を進め始めたのが二〇〇六年です。言い出しつべの私が事務局長になって、足かけ八年かかりました。

——「不都合な歴史」とは？

調べてみて明らかになってきたことは、送り出した